

# 推進力は地元の熱意 稼げる産業に育て、欧州で勝負したい



株式会社五十崎社中  
齋藤 宏之さん  
平成7年理工学部物理学卒業

愛媛県のほぼ中央に位置する内子町。緑豊かな山々と清らかな小田川の水流に恵まれ、江戸時代は和紙の一大産地としてにぎわいを見せた。現在も古い町並みが残り、情緒ある風景は海外からの観光客にも人気がある。

「小田川はこの町と和紙にとって、命の水源地です」。町を流れる川のほとりに立ってこう話すのは、「五十崎社中」の創業社長、齋藤宏之さん。齋藤さんはこの地域に江戸時代から伝わる「大洲和紙」を地名にちなんで「五十崎和紙」と呼び改め、五十崎和紙の製造や金属箔を使った特殊装飾、壁紙やはがき、文具などへの加工、インターネットやSNSを活用した宣伝、販売に取り組んでいる。

齋藤さんはこの町の出身ではなく、首都圏からいわゆる「Iターン」で移住した。神奈川県海老名市に生まれ、日大理工学部物理学に進学。ITの普及を見据えてエネルギー効率に関わる最新技術を専攻し、プライベートではバックパックを背負って世界各地

を旅行。卒業後はNTTインターネットに入社し、都内で勤務していた。

## フランス人デザイナー と運命の出会い

内子町へ移住するきっかけとなったのは、同町出身の妻、晶子さんだった。二人は理工学部時代の同級生で、晶子さんは英国留学を経て都内の国際機関に就職。結婚前年の平成12年、齋藤さんは初めて内子町を訪れた。ただ、「当時は伝統産業に特別な関心もなく、住むことになるとは考えもしなかった」と振り返る。

転機は、あるフランス人との出会いから始まった。

平成20年、晶子さんの父、亀岡さんが中心となって進める街興しの一環として、内子町商工会がフランスの著名な壁紙デザイナー、ガボー・ウルヴィツキさんを招待した。ガボーさんはもともと、金箔や銀箔で紙に装飾を施す「ギルディング」という技術の達人。齋藤さんはガボーさんのギルディングを目にした瞬間、「和紙とギルディングの融合に可能性を感じた」という。学生時代から起業に関心を持って来た晶子さんも、都内で仕事のある晶子さんを残し、齋藤さんは一人先に内子町へ移住。五十崎社中を立ち上

げ、ガボーさんからギルディング技術を習おうと考えた。五十崎社中の名称は、齋藤さんが敬愛する坂本龍馬が立ち上げた日本初の商社で、「海援隊」前身の「亀山社中」に由来するといふ。

だが、職人の技を聞き出すのは容易ではなく、ガボーさんはギルディングを教えるようとはしない。困り果てる齋藤さんの力になったのは、ほかでもない内子町の住民だった。住民は家族を連れて不慣れな国に住むガボーさんを気遣い、地元の野菜を届け、子供の保育園を手配。町の子供たちも、異国から来たガボーさんを「ヒーロー」のように歓迎した。

町ぐるみの温かなもてなしと、齋藤さんの和紙への情熱を認め、ギルディングと五十崎和紙との融合が始まった。「ガボーさんの心を開かせたのは、僕ではなく町の人のことです」。齋藤さんは少し照れ笑いしながら話す。

ギルディングは、金、銀、銅箔と銅箔が酸化して赤みや青みを帯びたさまざまな色の金属箔を特殊な接着剤で紙やガラス、金属などに貼り付ける。齋藤さんは、壁紙からランチョンマット、はがきやカードなどさまざまな大きさの和紙に、動物やアラベスク模様、ムーミンなどの人気キャラクターを描いた「ギルディング和紙」を生み出した。



伝統の五十崎和紙とフランス由来のギルディングが融合した「ギルディング和紙」の壁紙



(上) 昔ながらの風景が残る内子町の町並み  
(下) 約50年間、大洲和紙(五十崎和紙)を渡ってきた稲月千鶴さんは数少ない職人で、国の伝統工芸士にも認定されている



(左上)「千代の亀酒造」の前で笑顔を見せる齋藤さんと晶子さん  
(右上) 大洲和紙(五十崎和紙)の歴史は江戸時代までさかのぼるとされ、その品質の高さが評判となり内子町の発展に貢献してきた  
(下) 和紙を糸状のこよりにして張り巡らせ、所々に和紙を張った「こよ和紙」は、タペストリーや壁紙として人気

## 和紙の風合いと 金属箔の輝きが融合

ギルディング和紙は、五十崎和紙がもともと持つ素朴で柔らかな風合いと、アンティークのような落ち着いた輝きを放つ金属箔が見事に調和。斬新でモダンながらも、どこか懐かしい温かみを感じさせる。白い和紙に椿や竹を描けば和風の壁紙に、赤い和紙に金箔でリースを描けばクリスマスカードになり、デザイン次第で和紙の用途を広げることできる。キララクターものなどは、和紙に興味がなかった若い世代にも人気。近年、齋藤さんの新しい取り組みを見て五十崎和紙に関心を持ち、和紙職人の弟子入りをした20代の女性もいる。



### ◆プロフィール

齋藤 宏之(さいとう・ひろゆき)  
昭和47年神奈川県生まれ。大学卒業後はNTTインターネットで約13年間勤務。その後、同級生の妻、晶子さんの地元である愛媛県内子町に移住。金属箔で装飾を施した「ギルディング和紙」など新しい和紙を開発した。晶子さんの実家は、今年創業300年を迎える「千代の亀酒造」。同酒造も、若い世代にも親しまれる新しいタイプの日本酒の開発や海外輸出に取り組んでいる。趣味は写真撮影。

五十崎社中公式ウェブサイト  
<http://www.ikazaki.jp/index.html>

戻り、実家の酒造で働く晶子さんは齋藤さんを、「適応力が高く、人との距離感など、田舎にはない常識を持っていると感じる。友人、恋人でいたときには気がつかなかったことがここへ来て分かりました」とたたえる。

齋藤さんの夢は2つある。1つは、五十崎和紙を次代に引き継ぎ、街興しすること。「いいものを作ることは大切だがそれをいかに見せ、稼げる産業にするかが重要だと考えています」。もう1つは、夫婦の挑戦。「ギルディングの海外展開を、拠点設置、そして販路拡大という次のステージに進めたい。師匠のガボーさんもフランスにいて、ヨーロッパで仕事をしてみたいと思っています。妻は妻で、欧州で日本酒を造ることにチャレンジする計画を立てているようです」。

挑戦し続ける人生。現役の目大生には、「自分のやるべきことがこれだと思ったら、タイミングを逃さずに動き出してみよう」とエールを送る。